Bibliophiles

ビブリオファイルズ　No.7(2020 年度)

新着図書案内・お知らせ　西宮東高校図書館

（ここで紹介するのは新しい本の一部です。）

『アルルカンと道化師』　池井戸潤

「3 人まとめて千倍返しだ！」の決めゼリフがこの秋の TV で大受けし、最終回の視聴率が 32％を上げた半沢直樹シリーズ。この本はその 6 年ぶりの小説シリーズ最新作です。しかし、時系列的には本作は前作の続編ではなく、むしろ第 1 作よりも以前の話になります。でも半沢ファンの方はがっかりする必要はありません！この作品は「謎解き」に重きが置かれ、主人公の半沢は、会社の「裏の顔」を探り当てる名探偵のように活躍しますよ。

『夜に駆ける YOASOBI 小説集』
星野舞夜ほか

「小説を音楽にする」というコンセプトで 2019 年に結成された音楽ユニット「YOASOBI」。YouTube で大人気となっている今話題のユニットの「原作小説」が、この本になります。「死」や「予知夢」といった独特のダークな幻想世界が、テンポ感のある文体で表現されていますね。また巻末の QR コードをスマホに読み取らせば、ボーカルの ikura が本文を YouTube で朗読してくれますよ。

先生方の選んだ本からオススメ本をご紹介します！（第 2 弾）

英語科の先生方からは、もちろん英語学習に役立つ本をたくさん推薦していただきましたが、ひときわ、目立つのが**末次由紀『バイリンガル班　ちはやふる』**です。「バイリンガル」の名の通り、英語と日本語の 2 カ国語で書かれており、この漫画の愛読者はもちろん、初めてこれを手にする人も容易に内容を理解できますよ。理科の先生方が選んだ**キャスリン・マコーリフ『心を操る寄生生物』**は、まさに衝撃的な内容です。僕たちの腸内に微生物が多く棲んでいることはご存知でしょうが、この本の作者によれば腸内細菌の種類によってその人の性格や行動まで変わってしまうそうです。何かの SF かホラーのような話ですが、気になる人は是非ご一読を。家庭科の先生からは**鳥居**の**歌集『キリンの子』**と彼女の**伝記『セーラー服の歌人 鳥居 拾った新聞で字を覚えたホームレス少女の物語』**を。母子家庭での母の自殺、施設でのいじめやホームレス生活など、壮絶な彼女の半生を振り返るとともに、彼女がそれでも生き抜くために紡ぎ出した歌の数々をじっくりとかみしめてみて下さい。

生徒による選定本をもっとご紹介します！（第２弾）

みなさんの関心の高い「漫画」では、**『約束のネバーランド』『ハニーレモンソーダ』『SPY×FAMILY』『王様ランキング』**の 4 つのシリーズコミックが選ばれました。**『約束のネバーランド』**はすでにアニメ化され、実写版映画も浜辺美波主演でこの 12 月に公開が予定されています。世界が人間世界と鬼の世界に二分された近未来が舞台で、鬼の世界の孤児院で暮らす主人公のエマたちはやがてこの孤児院は「人間飼育場」にほかならないことを突き止めるのですが・・**『王様ランキング』**は、ある国の体が小さくて非力で耳も聞こえず言葉も話せない、とても王様には似つかわしくない王子ボッジが主人公です。しかし彼は立派な王様になろうと夢見るのでしたが・・

漫画以外の本も盛りだくさんです。日本卓球界の至宝・**水谷隼の『負ける人は無駄な練習をする―卓球王 勝者のメンタリティー』**は、まず自分のことを「卓球王・勝者」と言い切る題名に驚かされます。読んでみると「試合では自分が一番だと思っていないと勝てない。ふだんは好かれるようにしている。」という意識みたいです。スポーツでも勉強でも「勝ちたい」人はメンタル面で参考になりますよ。代々木ゼミナールの人気講師・**堀内剛史の『ココがスタートだ！今どきの小論文』**は、小論文を５つのタイプに分け、タイプごとに攻略法を指南しています。原稿用紙の使い方や NG な文章表現の見本などもバッチリ解説してくれる、頼りになる参考書です。ベストセラー『ボクたちはみんな大人になれなかった』の **“燃え殻”**（すごいペンネームですが）の最新作**『すべて忘れてしまうから』**は、読んだ後に心のどこかにくすぶり続けるようなエッセイ集。タイトルについて作者は「やっぱり書いておいてよかった。あの夜、編集の T さんに無理やり誘ってもらってよかった。だって良いことも悪いことも、そのうち僕たちはすべて忘れてしまうから。」と説明しています。

『アイヌの権利とは何か 』
テッサ・モーリス=スズキ, 市川 守弘他

北海道の先住民族・アイヌの人たちは長年、さまざまな差別を受け続けてきました。昨年いわゆる「アイヌ新法」がようやく成立しましたが、この本はさまざまな角度から現在のアイヌをめぐる問題を浮き彫りにしています。

今号のひとこと

If it wasn't for baseball, I'd be in either the penitentiary or the cemetery.

もしこの世に野球というものがなかったら、私は今ごろ刑務所か墓の中のどちらかに入っていたことでしょう。　　ベーブ・ルース(1895-1948)

「野球の神様」ベーブ・ルースは、子供の頃はいわゆる「不良」で、7 歳の時には早くも両親の手には負えなくなり、全寮制の矯正学校に送られています。その学校で彼は尊敬できる神父に出会い、また野球というスポーツにも触れて徐々に才能を発揮していきます。ルースは上に引用した文のあと、「自分は死んだ父や兄と同じく激しい気性だ。彼らはカッとなってやった喧嘩のおかげで命を落としているんだけどね。」と語っています。

（出典：フレッド・リーブ『私の知っている野球』）

※ほかにも、住野よる『この気持ちもいつか忘れる』有川ひろ『イマジン？』など話題の小説も入っています。